

RICHARD II の悲劇の構造

市川 真理子

The Tragic Structure of RICHARD II

by Mariko ICHIKAWA

1

Richard II は、その時々に応じて、悲劇としての扱いと歴史劇としての扱いとをほとんど平行的に受けてきた。¹ それはこの劇が、おそらく何らかの不足や余剰があるにもかかわらず、それでも悲劇ないしは歴史劇としての体裁を有するものとして認められてきたということである。² ところで、そうした体裁はいかなる仕組みによって支えられているのであろうか。さしあたり、本論では、この劇の悲劇としての体裁を支える仕組みの方を説明するように努めたいと思う。

2

最初に冒頭シーンを見てみよう。³ I.i は概ね次のような展開となっている。まず Richard が貴族たちや侍臣たちを引き連れて登場し、今日こそは、Bullingbrook が過日彼のところに持ち込んだ Mowbray に対する訴えの是非を質す日であるとして、二人を呼び出す。

K. Rich. Then call them to our presence;⁴ face to face,
And frowning brow to brow, ourselves will hear
The accuser and the accused freely speak.
High-stomach'd are they both and full of ire,
In rage, deaf as the sea, hasty as fire.

(15-19)

こうして、彼が二人の衝突に備えて、聞き役の構えで待っているところに、いよいよ原告と被告とが登場する。Bullingbrook が Mowbray の罪状を訴え、Mowbray がそれを否認する、Bullingbrook が Mowbray に決闘の挑戦をし、Mowbray がそれを受け、Bullingbrook が Mowbray の具体的な罪科（その最大のものは Gloucester の暗殺である）を摘発し、Mowbray がその一々に反駁する、というように、裁定者 Richard の審問に応じて、あるいは裁定者の存在にも構わずに、両者は激しい争論を繰り広げる。そこで Richard が調停に乗り出し、しかし叶わず、決闘の日と場所を定めて二人に出頭を命じ、閉廷する。このように、I.i は、大筋として、裁判といういわば公式戦の主催者（organizer）にして審判（judge）である Richard と、

対決者同士 (players) である Bullingbrook と Mowbray の二人との、連携ないしは呼応で構成されている。

ところで、前以て登場して準備に当たる側と、その準備に見合うだけのものを提示するべく登場する側との連携、それは Shakespeare 劇のいたるところに認められるものである。そして、今悲劇の冒頭シーンという位置付けで *Richard II*, I.i を見ているわけであるが、悲劇の冒頭シーンという箇所は、Shakespeare 劇の中でもまた特に顕著にそうした連携ないしはその変形が、しかも主人公と副次的人物たちないしは全くの端役たちとの間に成立しているのが、認められる箇所である。(もっとも、そうした両者の連携が冒頭シーンだけに収まらず、複数のシーンに亘っている場合も幾つかある。)しかし、そこでは、今の場合とは登場の順序が全く逆になっていて、副次的人物等が主人公を取り込もうとする悲劇的狀況を具体的に表現したり、あるいは主人公は既に悲劇的狀況に陥っているという情報を直接的に伝達したところに、主人公がその狀況を背負い込む存在として自身を提示したり、あるいはその狀況の具体例を表現してみせたりするために登場する、というような連携になっているのが普通である。

さて、そうした中に置いてみると、*Richard II*, I.i を構成している連携は、役割分担の逆転が認められる特異な存在というよりは、一回り小さいもの、他と同じ規模では欠如態、という姿を呈してくる。すなわち、主人公が何ら条件の整っていないところにいきなり登場して、副次的人物たちと連携して、王位にある者の権勢とでも呼ぶべきものの表現に当たっている(王権を行使して一応裁判の一切を取り仕切ってみせている)と見えてくる。これは、*Richard II*, I.i は主人公の悲劇的運命の始まりを少なくともそれと位置付けて提示するような仕組みにはなっていないということであり、取りも直さず、積極的に悲劇の冒頭シーンとして作られたものではない、ということである。*Richard II* という劇はきちんと最初から悲劇として始まっているわけではない、と言ってしまった方がよさそうである。こうした始まり方と、それと一体を成す主人公と副次的人物たちとの連携のありようを、しっかりと押さえておこう。

3

ところで、*Richard II* は、Richard を君主として始まり、Bullingbrook を君主として終る。つまり途中で両者間の地位の交替があるわけである。としたら、劇が進行すれば、どこかで両者間の役割分担の変化等も起こるのであろうか。Richard と Bullingbrook との間の葛藤や彼らの運命の変転はいかに提示されていき、そして、その中、Richard と Bullingbrook との連携の内容ないしは質はいかに変わっていくのか。また、それはこの劇の悲劇の構造にいかなる作用を及ぼしているのか。そうした観点から、劇の進行に沿ってシーンを一つ一つ見ていこう。後の整理の便宜と記述の簡略化を計って、当人たちが両方とも登場するシーンはアルファベットの大きい文字を冠して記し、上の条件から外れるシーンは肩文字付きの小文字を冠して記しておく。(肩文字 r, b, φ は、順に、両者のうち Richard のみ登場、Bullingbrook のみ登場、いずれも登場せず、を表す。) なお、遡及的に I.i を (A) とする。

さて、まず (a^φ) I.ii であるが、裁判のシーンと決闘のシーンとの間に挟まっているこの短いシーンは、Gloucester の暗殺は究極的には Richard の罪であるという決定的な情報を提供して、だから彼は裁定者として実は極めて複雑かつ微妙な立場にあったのだと、前のシーンの補足説明をするとともに、彼が次のシーンで再びその役割を果たす方法自体に強い照明を当てる

解説的シーンである。⁵

それを受ける (B) I.iii. Richard は, Marshal を仲立ちとして, Mowbray と Bullingbrook を迎えて, 決闘に臨む二人が踏むべき手続きをすべて踏ませ, さらに申し出に応じてそれぞれの身内等に対して別れの挨拶もさせてやって, いよいよ試合の開始を命じる。ところが, 開始を命じたかと思うと, すぐさま中止を命じ, 二人に追放の宣告を下す。そうして, 追放者が立てるべき誓いを二人に立てさせて, Mowbray を解放した後, Gaunt に対する思いやりと称して Bullingbrook の刑を多少軽減した上で, 父子を後に残して退場する。というように, やはりここでも Richard は, 決闘の主催者 (organizer) にして審判 (judge) の立場にふさわしく, 終始対決者同士 (players) である Bullingbrook と Mowbray の二人を取り仕切っているのであるが, はたして, 彼がそうした役割を果たしている方法自体が, その理不尽さゆえに, 非常に目立つようになっている。ところで, 追放の宣告を以て Bullingbrook と Mowbray との対立関係は消滅したわけであるが, それをきっかけとして直ちに Richard と Bullingbrook との敵対関係が確立するという運び方にはやはり無理があるのであろう。後に残された Bullingbrook は, 例えば主人公の後に自ら残った悪漢役のように, 恨みだとか復讐の決意だとかいうような, 直接 Richard に影響が及んでいくような悪感情を露にしたりすることなく, あくまでも追放の憂き目に遭った悲しみを表現するだけで退場する。

次の (b^f) I.iv は, Bullingbrook が (Mowbray を訴えることで) Richard に対してもたらした問題はすっかり片付き, 彼は次には Ireland 人の反乱という新たな問題に対処しようとしているということ, つまり, 一つの流れの終結と新たな流れの開始とを伝達するシーンである。(ほぼ中間にある 'Green. Well, he [i.e. Bullingbrook] is gone, and with him go these thoughts. Now for the rebels which stand out in Ireland, ...' (37-38) という台詞は, いわばこのシーンの要である。)

さて, そのようなシーンに続く (c^f) II.i では, まず Gaunt が York らとともに登場して, Richard を待ち構えているという様子を見せる。そうして, 彼に関する「予言」と称して放埒=自滅説を打ち出すが(31-39), これは主人公の辿る運命の方向を示す指標に他ならない。⁶ さらに, 本人が登場した後もそのまま「予言者」の態度を取り続けて, 彼こそが病篤くて国土を死の床として臥しているのだし, 退位の身でもあるのだと断言する (91-108)。Gaunt が言うべきことを言い尽くし, すなわち, 果たすべき役割をすっかり果たして, 退場し, その死を告げる知らせがもたらされると, Richard は Ireland の戦争の費用として彼の財産を没収する意志を明らかにする。York は, まずそれを何よりも相続人である Bullingbrook に対する権利の蹂躪と評し, さらに Richard 自身の王位を否定する行為と換言し, そうして, 断行すれば必ずその身に危難を招くこととして, それを前以て Richard の運命の中に位置付ける (201-5)。(York は Gaunt の後に残って, 「予言者」の役割を引き継いでいるわけである。)しかし Richard はその意志を翻すつもりのないことを明らかにして退場し, 後に Northumberland を始めとする貴族たちが残る。彼らは Bullingbrook に対する同情と Richard に対する批判を口々に表明する (224-69)。つまり二人を天秤に掛けている, というか, Richard と Bullingbrook とを対極的關係にある者たちとしてしっかりと位置付けているわけである。そうして, 彼らは届いているという知らせを披露する側とそれを聞く側とに分かれて, しかしいずれの側に回った者も既に彼らが表現に及んでおり Bullingbrook の味方であるということであらためて確認し合った上で(274-76), だからあくまでも Bullingbrook 側の目を以て, すなわち非常

に喜ばしきこと、あるいは望ましきこととして、Bullingbrookの帰国の事実と彼らのRichardからの離反の意志とを伝達して退場する。

ようやくRichardの運命の方向と彼の致命的な過ちとが示されたわけであるが、しかし、それらは「予言者」の鋭い目と容赦のない口を通して明らかにされたのであって、主人公の運命の下降を嘆き悲しむ者の同情的な目や口を通して示されたわけではない。そうした悲劇的視点が導入されるのは次のシーン(d⁴) II.ii のことである。そこでも、やはりBullingbrookの帰国および貴族たちのRichardからの離反という出来事と、さらにその対策のために必要とされる者たちの不在と死去という状況とが、II.iの形に多少変化が加えられて、知らせがその場にもたらされるという形で伝達されるようになっているのであるが、そこでは、Richardを送り出した後晴らす術もないという悲しみについて語るQueen(1-40)と、彼の留守に王国を支えるべく残された身である(‘Here am I left to underprop his [i.e. Richard’s] land’ (82)⁷)とはっきり表明するYorkとが、まさにRichardの愛妃あるいは彼の代行者という資格において知らせを受ける仕組みになっていて、彼らの目を通して、同じ出来事や状況が非常に不幸なこと、つまり、もはやBullingbrookの運命の上昇の兆しなどではなくて、あくまでもRichardの運命の下降の兆しとして伝達されるのである。⁸王者の没落こそは、悲劇の伝統的・古典的な主題であるが、⁹流れの切り替わりの伝達、目指す方向の表示、決定的な敵対関係の確立、そして悲劇的視点の導入、という一連の手続きを以て、劇はRichardの失墜と滅亡を、Bullingbrookの昇進と繁栄を下敷として、描き始める準備を完全に整えたのである。

4

(e^b) II.iii. 帰国したというBullingbrookは、このシーンになってようやく登場する。彼はNorthumberlandに伴われて登場し、それにその息子Harry Percy、さらにRossとWilloughbyを加えて、結局Richardから離反した者たちを背後に従えた状態で、まずは使者のBerkeleyを、そしてついにはYorkを迎える。Berkeleyが、彼は王権代行者としてのYorkのところからBullingbrookのところへ遣わされた使者であると表明することで、結局はYorkがBullingbrookのところに登場する資格を前以て明らかにしているのであるが(76-78)、登場したYork自身も、彼はBullingbrookに叔父として対しているのではなくて、あくまでもRichardから王権を預かっている者として対しているのだとその資格をはっきりと表明して、さらにBullingbrookの行為に「反逆」の名を与える。

Bull. My gracious uncle—

York. Tut, tut!

Grace me no grace, nor uncle me no uncle.

I am no traitor’s uncle,...

Com’st thou because the anointed King is hence?

Why, foolish boy, the King is left behind,

And in my loyal bosom lies his power.

...

Bull. My gracious uncle, let me know my fault,

On what condition stands it and wherein?

York. Even in condition of the worst degree,
In gross rebellion and detested treason.

(85-88, 96-98, 106-9)

これは、直接的なものではなくて、代行者の介在が認められるが、しかし Richard と Bullingbrook との第一回目の対決、というか、もっと正確に言えば、Bullingbrook に対する Richard の（無駄な）抵抗である。結果は Richard 側のあっけない抵抗解除（York の中立宣言（158-59））。そして、最初の抵抗を難なくかわしたことに勢いを得て、Bullingbrook は自分の方から、もう York を自分の側に取り込んだ形で、Richard の側に対して先制攻撃を仕掛ける（Richard の取り巻きを退治する）意志を表明する。以上が II.iii の粗筋である。ところで、大雑把に言うと、このシーンは、Bullingbrook のところに Richard 側の人物が登場するという構造になっている。無論、Bullingbrook が登場者と真正面から向かい合いやり合っているという対話の形が備わっていることであるが、彼が Richard 側の抵抗を撥ね付けるという意味の源泉は、やはりその構造に求められよう。

さらに、Richard が頼みとしている Wales の軍勢も解散することになったということを示す (f⁹) II.iv と、Bullingbrook が確かに Richard の取り巻きの撲滅を実行しているということを示す (g^b) III.i とを経て、(h^r) III.ii. いよいよ Richard が登場するわけであるが、先行する三つのシーンの作用によって、彼は知らぬままに既に二敗ないしは三敗を負うてしまっている者となっている。それにもかかわらず、Bullingbrook に対する王位ゆえの優越性について滔々と語っているところに、上の三つのシーンで扱われた出来事を内容とする知らせをもたらす人物たちが登場する。このような構造を以て、III.ii は、Richard が Bullingbrook に敗北の屈辱をまとめて一遍に味わわされて、王としての権威と自覚を揺さぶられ、ついには完全に絶望感に打ちのめされる、ということ表現するものとなっているのである。

さて、そのような表現を以て Richard と Bullingbrook の葛藤の筋が一段落したところに設けられているのが (C) III.iii である。まず Bullingbrook が味方を引き連れて登場する。彼の軍勢がたまたま Richard の籠っている城に到着したという設定のものであるが、しかし、その登場は何といっても Richard の登場を迎えるためのものである。彼は Richard との衝突を想定しながらも (54-57)、その構えを示すことは抑え、ちょうど I.i で Richard が彼と Mowbray を迎える際に見せたのと全く同じ観察の構えを見せて、Richard に存分に激しく振舞わせてやろうとする。

Bull. ...

Be he the fire, I'll be the yielding water;
The rage be his, whilst on the earth I rain
My waters — on the earth, and not on him.
March on, and mark King Richard how he looks.

(58-61)

そして、Richard が上舞台に登場すると、その登場の描写に当たるが、そのためには、彼の前に立っている自分たちを太陽の行く手を遮る意地の悪い雲に比えることさえも辞さない。(もっとも、さすがに悲嘆の念を表現することは York に任せているけれども。)一方、このようにして迎えられる Richard も、大敗を喫して王としての誇りを完全に喪失しているとされているわ

けて、もう使者を相手として冒瀆行為が国土全体にもたらす災いを予言するという形でしか Bullingbrook に太刀打ちせず、¹⁰ 彼の要求を全面的に容れることを申し出て、ひとしきりは自身のふがいなさを嘆き悲しんでみせるが、やがて Bullingbrook の指示を仰ぎ、その指示に従って己が身を Phaëton に準えながら下舞台に降りるというようにして、転落という意味と形を与えるように演技を尽くしながら、王権の実質的放棄である無条件降伏をする。Richard と Bullingbrook が連携して一つのシーンを築くのは I.i および I.iii 以来のこと（ただし、一対一で対等に連携するのはこれが初めて）であるが、ここでは Bullingbrook が儀式の主催者役（organizer）の方を、そして Richard が演技者役（player）の方を受け持って、¹¹ 今こそ、両者は、主人公の悲劇的運命の決定的段階の提示というスケールの事業に共同して当たっているのである。なお、このシーンの末尾は、Richard の Bullingbrook に対する譲位の意志表示となっていて、譲位のシーンへの架け橋とでも呼ぶべき機能を果たしているのであるが、間に(i⁴)III. iv という短い解説的シーンが挟まっていて、前後に互って提示される Richard の不幸を、国家の秩序という枠組みの中に位置付けて、統治者としての職務を怠った以上自業自得であるとしながらも、再び Queen の胸の悲しみという濾過装置にかけて、やはり同情に値するものとしてまとめている。¹²

さて、その譲位のシーン（D）IV.i は、（生きた姿の）Richard と Bullingbrook が両方とも登場する最後のシーンである。Bullingbrook が、I.i において Richard が果たしたのと全く同じ裁定者の役割を果たして、Gloucester の殺害の罪を糾弾する側とされる側との争論に一応の片を付ける。このようにして、彼が王権を先取りして行使してみせたところに、まず York が登場して、彼自身ははっきりと表明しているように（107-8）、Richard と Bullingbrook との間に立つ使者という資格において、前者から後者への王位の譲渡を言葉の上で完了させる。しかし、無論、これで済むはずはない。なぜならば、この劇は Richard の悲劇なのだから。主人公である彼がそのような決定的な段階の提示に直接関わらずして済むはずがないのだ。¹³ そこで、Richard を敗者に仕立ててとうとう譲位にまで追い込んだ、その意味においてまさに譲位という儀式の仕掛人である Bullingbrook が、ここでは先程よりもまたさらにずっと積極的な主催者役（organizer）となって、Richard を演者（player）に見立てて、衆目の前で譲位を演じさせるべく、彼の登場の段取りをつける（‘Fetch hither Richard, that in common view He may surrender...’（155-56）。¹⁴ Richard がわざわざ登場する以上、ただ Bullingbrook に王冠を譲り渡して退場するというわけにはいかない。彼は Bullingbrook の手を借りて、まず何よりも悲しみの表現に携わり、それを思いのままにする権利まで放棄してはいないはずだと主張する。

Bull. I thought you had been willing to resign.

K. Rich. My crown I am, but still my griefs are mine.

You may my glories and my state depose,
But not my griefs; still am I king of those.

(190-93)

そして、彼の自己破壊の過程として見るように促した上で（‘Now mark me how I will undo myself...’（203））、ようやく、しかも暫くかかって、その手に王冠と王笏を王権の一切とともに譲り渡すが、それではまだ足りず、Northumberland が無理にも押し付けようとする彼自身の罪の弾劾文という「台本」を拒否し、その代わりに Bullingbrook に鏡という「小道具」

を調達してもらって、¹⁵ 自分の顔を映している鏡を粉々に砕いて、破滅、というか、むしろ自滅を形に表して見せ、しかもその意味（‘the moral of this sport’ (290)）を解説しきえて、讓位の意味を徹底的に視覚化したところで、Bullingbrook に対して退場の指示を仰ぎ、その手配に従って、London 塔に護送される身ということになって退場する。なお、Bullingbrook も程なく貴族一同を引き連れて退場するのであるが、その後に残った人物たちの対話は、彼に対する陰謀の発生を主題とするもので、一段落してさらに文字通りカタ（「形」としたいのだが、今の場合、「片」もまた当て嵌まる）が付いた葛藤の筋の再開を予告するという機能を果たしている。

5

というわけで、新段落冒頭を飾る (j^r) V.i. このシーンは、Richard が Bullingbrook の意向の変化によって北国 Pomfret に転送されて行くということ、つまり、王の脱け殻となった身（‘King Richard’s tomb’ (12)）が新王から受ける屈辱を、彼と Queen との別離と絡ませて哀愁たっぷりに描き伝えるものである。（なお、Richard は、Bullingbrook の新しい意向を携えて登場した Northumberland をわざわざ Bullingbrook の道具として位置付け (55-56)、さらに彼らの間の断絶を予言している。）

それに続く (k^o) V.ii と (l^b) V.iii は、Bullingbrook に対して企てられた陰謀の発覚を、V.i とは対照的に家庭騒動的な滑稽さを以て扱っているのであるが、まず V.ii は、下に見られるように、

York. ...

To Bullingbrook are we sworn subjects now,
Whose state and honor I for aye allow.

Duch. Here comes my son Aumerle.

[Enter AUMERLE.]

York.

Aumerle that was,
But that is lost for being Richard’s friend;
And, madam, you must call him Rutland now.

...

(39-43)

York は Bullingbrook 側、Aumerle は Richard 側であると、父子がそれぞれ付いている側を確認した上で、York による Aumerle 一味の陰謀の発見を提示するものとなっているし、また、V.iii は、Bullingbrook が Aumerle を許して持ち込まれた家庭騒動に決着をつけるというところでは終ってはいなくて、彼が一味の処分を断固として指示し、許してやった Aumerle には今後の忠誠をしかと命じるというところまできちんと提示するものとなっているのであって、二つのシーンを貫くものは、あくまでも、Richard 側のあるいは巻き返しの最後のチャンスともなり得たかもしれないものが Bullingbrook 側によって完全に潰されるという筋である。

これまで幾度か、ある人物が Richard 側なのか Bullingbrook 側なのかということをやわざわざ取り立てて伝達するための台詞の存在に言及してきた。その都度述べてきたように、そのような台詞があってこそ、各シーンは Richard と Bullingbrook の勝負を一つ一つ提示するものと

なっているのだし、また、両者の葛藤こそ、(悲劇として見るにせよ、歴史劇として見るにせよ)この劇の筋となっているのだから、そのような台詞が各シーンを、そしてこの劇全体を、構造的に支えるものとしてどれ程重要なものであるかということはいくら強調しても構わないと思うが、終幕間際にある(m⁴)V.ivという非常に短いシーンは、まさにそのような台詞‘Exton. . . I am the King’s friend, and will rid his foe.’(11)をエッセンスとしていて、その語り手は彼個人としてではなくて、確かに Bullingbrook の味方として Richard が幽閉されている Pomfret に赴くのだということを伝達するためのシーンである。さらに、そうしたシーンを受けることで、(n^f) V.v は、元来、Richard の身が Bullingbrook 側の者たちに襲われて、それこそ初めての勇氣あふれる抵抗にもかかわらず、ついに滅ぼされるという意味を持つような構造に整えられている(Richard のところに Exton を始めとする暗殺者たちが登場する)のであるが、そこでも、彼らの登場の直前にあらためて彼らの付いている側が確認されるようになって(‘Keep. . . Sir Pierce of Exton, who Lately came from the King, commands the contrary,’(100-1)¹⁶)、その構造の意味が決して曖昧になることがないようにしているのである。なお、当然ながら、その意味の伝達を以て、Richard と Bullingbrook の葛藤の筋は完結する。

そして、最終シーン(E) V.vi. まず Bullingbrook が York やその他の貴族たちとともに登場し、反逆者たち、すなわち Richard 側の者たちに関する最新情報を待ち望むという構えを示す。このようにして迎える態勢が整えられたところに、次々と処刑の報告を携えたり、生き残りといわれる人物を連行したりして、Northumberland や Percy らが登場し、ついには、Richard 自身の亡骸を取めたとされる棺を運んで、Exton が登場する。Bullingbrook はその一々に対して反応を示すことで、登場者たちと共同して、Richard 側に付いた者たちと Richard 自身の終末の確認に当たっているわけであるが、Richard の死という最も重要な情報に対しては、その殺害の行為を Bullingbrook 自身と国土とに対して罪と汚れをもたらしたものと評し、深い哀悼の念を表明し、棺を見送って行くために一同を指揮して葬列を整える、という反応を示す。彼はここでも葬送という儀式の主催者役(organizer)を受け持っていると言ってよい。ならば、Richard は、と言うと、Bullingbrook のところに棺の形で「登場する」彼は、Bullingbrook によって悲しみ悼むべきものという意味を付与してもらうべく、死を形を以て「提示する」役である。(‘displayer’ とでもしようか。無論、Exton が、Bullingbrook への棺の献上とその中味の説明という行為によって、それを代理的に果たすのであるが。)こうした両者間の連携、すなわち主人公の死を悲劇的終末として提示するという共同事業を以て、この劇は、確かに悲劇として終わっているのである。¹⁷

6

これまで観察してきたことを整理しよう。Richard II という劇には、始めと中間と終りに Richard と Bullingbrook が両方とも登場するシーンがあって、それらは順に、Richard による王権の行使(A-a-B)、王権の実質の放棄と象徴の譲渡(C-i-D)、彼のための葬送(E)を扱っている。そして、その間には、二人のうちいずれかしか、またはいずれも、登場しないシーンが並んでいて、Richard と Bullingbrook とを、単純な言い方をしてしまえば、被害者と加害者という関係にある者たちとして位置付けた上で(b, c, d)、両者の葛藤を、まずは Richard

が Bullingbrook の勢力に押されて王位を根拠とする誇りを粉々に碎かれるところまで (e-h), さらには Richard の身が Bullingbrook の味方によって滅ぼされるまで (j-n), というように、前後二段階に分けて扱っている。要するに、主人公の悲劇的運命の前段階と折り返しと締め括りを提示する三種の儀式的シーンと、その間を繋ぐ、主人公の運命の下降を提示する、準備段階付きの二部構成のシーンの流れ。そのような構造を以て、*Richard II* という劇は、Richard の運命を悲劇的に描き上げているのである。

注

¹ 因みに、この劇は、作者 Shakespeare の生前単行本の形で出版された際には (Q1 (1597), Q2 (1598), Q3 (1598), Q4 (1608), Q5 (1615)), 'THE Tragedie of King Richard the second / Second' という表題を与えられていたが、彼の死後一冊本の全集が編纂された際には (F1 (1623)), 'The life and death of King Richard the Second' と表題を改められて 'HISTORIES' の部に収められた。確かに、当時は、'tragedy' だとか 'history' だとかいう語の意味はそれぞれに今日よりもずっと広がったようだし、関連して、ジャンルの区別も相当に緩やかだったようだ、ということは見過ごすわけにはいかないが、しかし、上の二通りの分類法が、この劇が単独的に捉えられる際と、Shakespeare 劇全作品というコンテキストの中で捉えられる際とに、まず認められる特徴ないしは性質を反映するものであるということは、おそらく間違いあるまい。(See, e.g., Lily B. Campbell, *Shakespeare's Histories: Mirrors of Elizabethan Policy* (1947; rpt. London: Methuen, 1980), pp. 8-17.)なお、Shakespeare 劇の古版本については、A Facsimile Series of Shakespeare Quartos, 70 vols., issued under the supervision of T. Otsuka (Tokyo: Nan'Un-Do, 1975); *The First Folio of Shakespeare: The Norton Facsimile*, prepared by Charlton Hinman (New York: W. W. Norton, 1968) を参照する。

² なお、近ごろ、この劇における悲劇的な面と歴史劇的な面との絡まり具合についての論考も見られる。(E.g., Michael Quinn, "The King Is Not Himself": The Personal Tragedy of Richard II, *Studies in Philology*, 55 (1959), 169-86; John R. Elliott, Jr., 'History and Tragedy in *Richard II*,' *Studies in English Literature, 1500-1900*, 8 (1968), 253-71.)

³ Shakespeare 劇のテキストは、G. Blakemore Evans, ed., *The Riverside Shakespeare* (Boston: Houghton Mifflin, 1974) を使用する。

⁴ ここで命令を受けたとされる人物が退場する。つまり、諸版の基となっている Q1 や F1 では、例えば 'Exit Attendant' のようなト書きが省略されているのである。(See Stanley Wells, ed., *King Richard The Second: The New Penguin Shakespeare* (Harmondsworth: Penguin Books, 1969), p. 55; p. 163.) さらに付言すれば、その退場は Bullingbrook たちの登場の予告として機能し、そしてそれを受ける残りの四行余りは、彼らの対決のいわばプロローグとして機能するのである。(そのような台詞については、拙論「シェイクスピア劇の台詞の構造——人物の登場・退場を背景とする台詞について——」(『人文研究』第70輯(小樽商科大学, 1985年)所収)で詳しく論じた。)

⁵ 既に *Thomas of Woodstock* が上演されていたにせよ、いなかったにせよ、Gloucester の死に関する歴史的事実が当時の観客の常識となっていたかもしれないということは容易に想像される。しかし、たとえ常識であったとしても、その情報が、わざわざ、しかも上のようなシーンの配列の中で提供されているということは、Shakespeare 劇の情報伝達構造の特色を成す重要な事実ではないだろうか。(See Mark Rose, *Shakespearean Design* (Cambridge, Mass.: Harvard Univ. Press, 1972), pp. 143-44.)

⁶ なお、彼は、その「予言」の後暫く England の賛美に当たるが (40-56)、その誇るべき国土が (Richard の放埒のせいで) 今や恥辱にまみれていると嘆くことで (57-68)、話題の飛躍に收拾をつける。こうした、Richard の行為や運命等を国家的空間ないしは歴史的空間の中に位置付けるような工夫は、劇の要所要所に認められるが、それはこの劇の歴史劇としての体裁を支える仕組みと言ってよいだろう。(See Elliott, pp. 266-71.)

⁷ York が Richard と Bullingbrook のいずれに対しても等しく叔父という位置にあるということもあって、今掲げたような台詞は非常に重要な意味を担っている。なお、彼がこうした台詞を語りながらもやはり二人の甥たち

の間を激しく揺れ動く気持ちを示したり、あるいはわざわざこうした台詞を語って馬鹿正直なまでに忠誠を尽くしてみせたりするところは、確かに滑稽なのであって、つまり、こうした台詞は彼の滑稽さを形成する要因としても働いているということは一応認めておきたい。(See Wells, pp. 32-33; Phyllis Rackin, 'The Role of the Audience in Shakespeare's *Richard II*,' *Shakespeare Quarterly*, 36 (1985), 277-79.)

⁸ その仕組みに関しては、拙論「シェイクスピア劇の情報構造——情報の受け皿——」(『情報研究』第7号(文教大学, 1986年)所収)で詳しく論じた。

⁹ See Aristotle, *On the Art of Poetry*, trans. T. S. Dorsch (Harmondsworth: Penguin Books, 1965), Chapter 13.

¹⁰ この予言は、後の Carlisle の予言 (IV.i.136-49) と同様に歴史という座標軸を導入する機能を果たすが、主人公自身がそうした機能を有する台詞の語り手となっているということは、登場人物同士の(劇全体の中での)連携という観点からしても非常に興味深いことである。

¹¹ See Leonard F. Dean, 'Richard II: The State and the Image of the Theater,' *PMLA*, 67 (1952), 216; Peter Ure, ed., *King Richard II: The Arden Shakespeare* (1956; rpt. London: Methuen, 1978), p. lxxix.

¹² See Rose, loc. cit.

¹³ といふか、York の登場とそれに続く一連の対話は、本来、裁判の部分と譲位の部分との連結部として機能するものなのであるが、Elizabeth 女王の生前には、上演はともかくとして (See Andrew Gurr, ed., *King Richard II: The New Cambridge Shakespeare* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1984), pp. 9-10.), 少なくとも印刷においては、譲位の部分が削除されてしまったので、Qq1-3 では、本来の連結部を以て譲位が完了したということになっているわけである。

¹⁴ Cf. Ure, pp. lxxxix-lxxxii.

¹⁵ Cf. John Dover Wilson, ed., *King Richard II: The New Shakespeare* (1939; rpt. Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1976), p. 212.

¹⁶ この Keeper の台詞は、Holinshed が伝える Richard の毒味役の言葉をかなり忠実に再現するものとなっている。(See Geoffrey Bullough, ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. 3 (London: Routledge and Kegan Paul, 1960), p. 413.)

¹⁷ 言うまでもないが、歴史劇としての終りを否定しているわけでは毛頭ない。

Synopsis

Richard II, I.i, which shows Richard's dealing with a trouble which has originated from Bullingbrook's accusation against Mowbray, does not properly function as the opening scene of a tragedy, for it introduces the hero without showing the germ of his tragic fortune in any shape or form. Thus, *Richard II* does not begin as a tragedy: it is only after announcing the settlement of the aforementioned trouble (I. iv), showing Richard's infringement on Bullingbrook's rights as his fatal error (II. i), contrasting Richard with Bullingbrook to establish an antagonistic relationship between them (II. i), and introducing a tragic viewpoint which defines the former as the so-called injured party (II. ii) that the play finally begins to treat 'The life and death of King Richard the Second' in the manner of a 'Tragedie'.

It is noteworthy that while the story of this play centers on the process of the conflict between Richard and Bullingbrook, there are few scenes in which they appear together. In fact, it is just those scenes in which only one or the other or neither of them appears that deal with this process. Broadly speaking, such scenes make up two series, namely, I. iv-III. ii and V. i-v: these series of scenes show the initial and latter movements of the con-

flict, concluding with Richard's loss of his kingly pride and his loss of life, respectively. (Properly speaking, since I.iv—II.ii form, as indicated above, a preparatory stage for dealing with the whole process of the conflict, it is only the rest of the first series, i.e., II.iii—III.ii that shows the initial movement.) In these series of scenes, those speeches informing which of the two parties certain characters side with are very important, for in these scenes Richard and Bullingbrook never meet in person, and so at least one of the participants in the confrontation shown in each scene is a representative. In II.iii, for example, York has no sooner confronted Bullingbrook, saying '... I am no traitor's uncle, ... the King is left behind, And in my loyal bosom lies his power', than he confesses his weakness, professes himself neutral, and at last accepts Bullingbrook's request that he should go with him to extirpate Richard's favorites. It is also remarkable that Exton, who murders Richard in V.v, not only declares himself to be 'the King's [i.e. Bullingbrook's] friend' in the previous scene (V.iv), but is also introduced specifically as one 'who Lately came from the King' just before he enters to assault Richard in the very scene. Thus, taken overall, these series of scenes show nothing less than the sequences of defeats inflicted upon Richard by Bullingbrook.

The scenes in which Richard (or the coffin containing his body) and Bullingbrook appear together are the opening pair of scenes (I.i-iii), the central pair of scenes (III.iii - IV.i), and the last scene (V.vi). (I.ii and III.iv are short choric scenes which provide information necessary to understand the scenes before and after them.) In contrast to the scenes dealing with the process of the conflict, these (pairs of) scenes are all ritualistic, and show Richard's exercise of his kingly power upon Bullingbrook and Mowbray, his surrender of it to Bullingbrook, and his death mourned by Bullingbrook. In other words, these (pairs of) scenes show the preliminary stage, turning point, and conclusion of Richard's tragic fortune highly theatrically. It can be said that in each of these ritualistic scenes Richard and Bullingbrook (alone or together with Mowbray) act in concert with each other. In the cases of the central pair of scenes and the last scene, Richard (himself or physically represented by the bearer of his coffin) acts the role of a 'player' or that of a 'displayer' and gives a concrete and symbolic form to each stage of his tragic fortune. He is assisted by Bullingbrook, who acts as the 'organizer' of each ritual so that Richard may play spectacularly or so that his death may be formally mourned. In a word, they act together perfectly as a tragic hero and his antagonist. (For the latter can be defined as the 'organizer' of the misfortunes of the former.) This is in contrast to the cases of the opening pair of scenes, in which Richard acts as the 'organizer' and 'judge' of a match, and Bullingbrook and Mowbray act as the 'players' in it.

In sum, *Richard II* has three ritualistic (pairs of) scenes and two series of scenes running between them. It is with this basic structure that the play presents the conflict between Richard and Bullingbrook as the tragic fall and death of Richard, rather than the rise to power of Bullingbrook.

(文教大学情報学部助教授)